
Tender Snow

あると

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Tender Snow

【NZコード】

NZ5638N

【作者名】

あると

【あらすじ】

俺が憧れた先輩は、誰にでも優しい人だった。

その先輩が結婚するという。

遊びに行く約束をした数日後、

平和だった国が一変した。

先輩といつ人（前書き）

作中に登場する病気「ナルコレプシー」は、物語上、簡易な症状にしてありますので、ご留意ください。

先輩という人

大村先輩は、あまり人と話すことを好まない人だつた。話を振れば穏やかな表情で受け応えてくれるけれど、向こうから話題を振つてくることがない。大人しい、というのが俺たち後輩に共通した印象だつた。

だけど、面倒見がよくて、誰からも好かれていた。試験勉強でわからないところがあると、過去問を引っ張り出してきて丁寧に教えてくれたし、些細な悩み事にもじっくりと耳を傾けてくれた。

目立たないけれど、頼りがいのある兄貴。

そんな先輩に、俺はいつの頃から憧れていた。先輩のいる大学を目指したのは、極めて単純な動機だつたのだ。

大学のキャンパスで再会したとき、先輩は静かに微笑んでいた。

「全然変わらないですね」

「そうでもないよ。実は今度、結婚することになつてね」

意外すぎる近況報告に、俺は言葉を失つた。

先輩はお世辞にも女性受けする顔立ちではない。高校時代は、女の噂なんて聞いたこともなかつた。結婚とは無縁と思い込んでいた。

「年貢納めるの、早いじゃないですか」

不自然な間の後に、つつこみを入れる。

「いわゆる許嫁というやつでね。年内には所帯持ちさ」

俺の失礼な態度にも、先輩は笑みを崩さない。

所帯という言葉に、オヤジ臭を感じたけれども、先輩が言うと、何故か地に足がついているように思えた。

詳しく話を聞くと、奥さんになる人は十八になつたばかりだという。まだ遊んでいたい年頃だ。彼女にしても、早すぎる結婚だろう。

「そうかもしけないね」

先輩は何故か口を濁した。俺は不思議に思つたが、今度遊びに行く

約束をして、その日は別れた。

それから数日もしないうちに、誰もが予想しなかつた出来事が起きました。

この平和な国で、戦争が勃発したのである。

戦争の発端となつたミサイル攻撃で、都心に住んでいた俺の両親は死んだ。犠牲者は数十万人とも言われている。

俺の周りの人たちも、親や兄弟、愛する人を失つていた。だからこそ、冷静でいられたのかもしれない。誰もが平等と思うことで、パニックに陥らずにすんだのだ。

「大丈夫かい？」

「何がです」

先輩が声をかけたのは、普段どおりの俺が異様に映つたからだと、後から聞いた。周囲のみんなが打ちのめされている状況で、菓子を食べながら漫画を読んでいるのは、確かにおかしな光景なのだろう。先輩が心配になるのも無理はない。

「僕と一緒に来るかい」

先輩は、妻となる早苗さんの元に避難すると言つた。田舎に住む彼女は、戦禍にも巻き込まれていなかつた。

「ですけど」

大学は間もなく閉鎖されるという。行くあてがない俺にしてみれば、ありがたい話だつた。ただ、彼らの間に、赤の他人である俺が割り込むのは心苦しい。

「むしろ、来て欲しいんだ」

先輩は不安げな顔をした。頼りになる兄貴がこんな目をすることに、俺は驚いた。

「僕たちを、助けてくれないだろうか」

俺は先輩の事情を思い出した。正しくは、早苗さんのことである。彼女は、特異な病気を煩つっていた。ナルコレプシーという病である。眠り病と表現したほうが実態をつかみやすいだろう。一日の大半を

眠り、たとえ目を覚ましても、突然、眠りの世界に戻ってしまう病気だった。

病が発症してから、療養所で暮らしていた。ここ数年の経過は思わしくなく、起きている時間はかなり短いらし。改善の見られない病状に、彼女の家族は諦めていた。見舞いに訪れるのも、月に一度、あるかないか。そして、この戦争で亡くなってしまった。

先輩が結婚を急いでいた理由は、彼女の境遇を慮つてのことだった。そして、戦争がもとでひとりになってしまった彼女と、一緒に暮らすことを決意したのだといふ。

この優しさは何なのだろう。

俺だったら、親が決めた許嫁なんてものは無視する。病氣の女なんて面倒くさいものは、なかつたことにして、健康で身近にいる女を彼女にする。

そんなことを思つても、全部が想像だ。

俺が先輩の立場だったら、どうするだろうか。何年も前から、結婚相手となる女性がいて、話をしたり、食事をしたりして、関係を育んでいたらどうだ。会うたびにエッチをして、相性もよかつたら、迎えに行こうとするのか。

わからない。俺は先輩ではないのだから。

先輩は、自分の力不足を口にしながらも、逃げずに立ち向かおうとしていた。そんな先輩が輝いて見えた。

「俺なんかが、役に立ちますか」

「僕だけでは、看病しきれるかわからない」「自信がないとも言つ。

俺が遠慮すると考えて、わざと弱々しく振る舞つていいのかもしない。勘ぐつてしまつほど、先輩はよく気を遣つ。

「行きます」

断る理由はもとからなかつた。俺から頭を下げて頼むくらいがちょうどいい。

今まで世話になつぱなしだった先輩に、恩返しができる。そう思

うと、嬉しさが込み上げてきた。
先輩は、いつもの微笑みを浮かべて、俺の肩を叩いた。

空から舞い降りてくる牡丹雪は、田で追つと田畠を誘つ。だから、雪を見ない。存在しないものとして扱つことで、まっすぐに歩くことができる。

バイト先から家まで、そつ遠くなかった。コートの色が白に変わるために、林の隙間に浮かぶ屋根が顔を出した。

北国の小さな家。

それが、先輩と早苗さんの新居であり、俺の疎開先だつた。木造の屋根が、積もつた雪でかすかに悲鳴をあげる。

「重いんだろうな」

家は、人間と違つて動くことができない。自分で振り落とすことはできず、誰かの助けを必要とする。いつ雪下ろしをしようかと考えながら、コートを脱いで雪を払つた。

「また、降り始めました」

薄暗いリビングに顔を出すと、暖炉の薪がはせて迎えた。

「春までこんな日が続くよ」

大村先輩は、椅子に腰掛けたまま、背中越しに返事をした。先輩はベッドに眠る早苗さんを見ていた。彼女は、時折にしか目を覚まさない。

「春までですか」

雪国の冬はどれくらい長いのだろう。このままでは、いずれ雪に埋もれてしまつのではないかと思うほど、外の世界は白かつた。

俺は、暖炉であぶられたパーコレータからコーヒーを注いだ。先輩に差し出すと「ありがとうございます」と言つて口に呑んだ。俺も身体をあたためるために、好きではないコーヒーの匂いを嗅いだ。

「まずは」

煮詰まつていた。朝から置きっぱなしに違ひない。先輩を見ると、気にした様子もなく飲み干していた。

「メシ、作りますね」

「ありがとうございます」

先輩からカップを受け取り、慣れた足取りでキッチンに向かつた。

奥の部屋で、冷蔵庫の扉を開けた。庫内の明かりは消灯していた。戦争が始まつて以来、電力の供給はどこも不安定だった。

今はもう扱い慣れた灯油ランプを近づけて、しおれかかった野菜を吟味した。

葉物野菜の表面に霜が降りていた。冷えすぎないように、冷蔵庫の蓋を閉めていても、この有様だ。

「こいつを使うか」

端っこが茶色くなつた白菜と、じゃがいもをふたつ取つた。

俺が料理をするようになつたのは、先輩たちと暮らすようになつてからだ。今では、人並み以上にできる。バイト先のお客さんに振る舞うのにも、気後れがなくなつた。

みんながうまいと言つてくれる。「そばゆく思いながらも嬉しかった。

先輩も俺たち後輩の面倒をみていたとき、同じような気持ちだつたのだと、近頃は思えるようになつた。

翌朝、暖炉の残り火に細い薪を足していると、人の動く音がした。

「おはようございます」

驚いて振り向くと、珍しく早苗さんが目を開けていた。

「あ、おはよう」

俺は返事をしたが、すぐに顔を伏せた。ひとつ年下の彼女を見るのが辛かつた。長い時間、眠つていたはずなのに、隈の浮かんだ顔が痛々しい。色が白く、瘦せすぎの顔立ちが病人だつた。

彼女も、自分がどう思われているか感じ取つたのだろう。何か言うとしていた口元が、ためらいがちに閉じられた。

俺は止まつた空氣をほぐすために、火掻き棒を動かした。早苗さん

がほつとした顔になるのがちらりと見えた。

火が熾ると、壁に映った俺たちの影が揺れた。その機を待っていたのか、早苗さんが口を開いた。

「冬弥さんは、ずっといたの？」

早苗さんは、ソファで眠っている先輩を見た。とても優しい表情だった。

「……そうだね」

俺は、ひと呼吸置いて頷いた。冬弥というのは、俺の名前でもある。下の名が同じということも、俺が先輩を慕う理由のひとつだ。

「先輩は、昨日休みだったから、一日中いたんじゃないかな」意識したわけではなかつたが、先輩というところに力がこもつてしまつた。彼女ははつとして、頬を染めた。恥ずかしがる彼女をかわいく思つた。妹がいたら、こんな感じなんだろう。

「俺が帰つてきたときも、君のそばにいたよ」

片時も離れず、顔を眺めていたと言つたら困るだらうか。赤くなつて照れるだらうか。それとも、先輩を束縛していることに、胸を痛めるのか。

そんなことを想像して、俺はどうしたわけか、嫉妬を感じた。

「冬弥さんは」

彼女は同じミスをして、唇を噛んだ。

「僕がどうしたんだい」

毛布にくるまつたまま、先輩が起き上がつた。早苗さんと田代が合つと、いつもよりやさしい笑みを浮かべた。

俺は居心地の悪さを感じて、朝食の用意を理由に、キッチンに逃げ込んだ。

優しむとは

発作は前触れもなく訪れる。

早苗さんの手から落ちたフォーケが皿にあたり、高い音を響かせた。先輩はあらかじめそうなることがわかつていたような素早さで、彼女を抱きとめていた。

早苗さんはうつすら目を開いたまま、眠りに落ちていた。トマトソースが口の端からこぼれて、血を吐いたように見える。だが、病が冒しているのは、彼女の身体ではない。眠りだけが、彼女の敵なのだ。

先輩が早苗さんをベッドに戻してから、ハンカチを手渡した。先輩は丁寧に彼女の口元を拭う。

「眠りてしまつた」

目蓋を閉じさせた先輩は、深いため息を吐いた。早苗さんが起きていた時間とは打って変わり、笑みも消え失せている。

「また、起きますよ」

慰めたつもりだったが、先輩の目は雪の吹きだまりのように冷たい。

「ありがとう」

感謝の言葉を口にしながらも、拳が固く握られていた。

「次はいつ、起きてくれるだろう」

今日か明日ならいい。二、三日後でも耐えられる。

「怖いよ」

先輩がかされた声を出した。

もう目を覚まさないかもしない。

咳きには、そんな恐怖が含まれていてよつだった。

俺は、無責任な慰めを言ったことを後悔した。楽観的な言葉など、意味のない戯言でしかない。

謝ろうと顔を上げたが、それもまた無意味だ。先輩は謝罪の言葉なんて聞きたくないだろつ。早苗さんが目を覚ますことだけを望んで

いる。

俺は深く椅子に腰掛けた。

指の隙間越しに先輩の背中を見ていると、昔が思い返される。

先輩は、困っている人を見つけたら、どんなときでも手を差し伸べていた。相談されたら、いつまでも話を聞いていた。

優しい人だと思った。

本当はそうではないのかもしれない。

先輩にとって、誰かを助けることはごく普通のことで、無意識のうちにフォローしたり、耳を傾けるものだ。だから、勉強の悩みを聞いた後でも、親と喧嘩したことを話しても、普段と変わらず、にこやかな顔を崩さない。

早苗さんには違つた。

彼女が倒れたとき、先輩はすぐさま身体を受け止めていた。食事中もずっと見ていたに違いない。彼女のことを注意深く見守り、意識し続けていた。

先輩が優しくするのは、彼女だけだ。彼女以外は、平等に、その他大勢でしかない。

もちろん、俺も。

何かが頬を伝う。

女々しくも涙ぐんでいることに気づいた。あわてて涙を拭い、音を立てないように鼻をすすつた。

パーコレーターの蓋がかたかたと鳴った。

苦い珈琲の味を思い出した。

夕方、早苗さんは何事もなかつたように口を開けた。

先輩に笑顔が戻った。

俺は腕によりをかけて豪勢なディナーを作ることにした。材料は新鮮ではなかつたけれど、外に出して自然冷凍していた肉も入れる。

「前より、料理がうまくなつたな

「すごく、おいしいですよ

一人の賛辞が嬉しかつた。

「そうですかね」

謙遜してみたが、自信はあった。素材がイマイチでも、下ごしらえや調理方法でなんとかなるものだ。

「こんな才能があつたなんて、驚きだよ」

先輩と同じバイト先に雇われたが、はじめは包丁の使い方さえ知らないかった。それが今や、仕事でも家でも、料理全般を任せられていた。

得意げにメインディッシュをサーブした後、物音を聞いた。

「ちょっと見てくれますね」

郵便だらうか。こんな時間に配達があるのは珍しい。

玄関の郵便受けを覗き込むと、赤い紙が一枚入つていた。

召集令状。

「嘘だろ」

小学校か中学校か、歴史の授業で学んだことがある。通称、赤紙と呼ばれるもので、遙か昔の大戦では、国が行つ徴兵の令状だ。紙面には、大村冬弥と先輩の名が印字されていた。

「どうした？」

なかなか戻つてこない俺を不思議に思つてか、先輩が廊下を覗き込んだ。俺は急いで赤紙をズボンのポケットに入れ、先輩を押し戻した。

「タヌキだつたみたいです。逃げられちゃいました」

肉を手に入れるチャンスだつたと言うと、二人は吹き出した。

早苗さんが先輩の腕に触れ、先輩はぽんぽんと彼女の手を叩いた。

若い夫婦の微笑ましい光景に、俺の頬も緩む。顔は、笑つた。だが、心の中は言葉で言い表せないものが渦巻いていた。

どうすればいい。

素知らぬ顔で、暖炉にくべてしまおうかと考える。灰になれば、なかつたことになる。

首を振る。

赤紙には、住所と名前がはつきりと書かれていた。無視しても、催促が来るに違いない。

「ちょっと食べ過ぎたみたいです」

俺は腹をさすりながら、先に休ませてもらひことにした。先輩たちは怪訝な顔をしたが、背中で壁を作つて寝室に逃げ込んだ。冷たい布団に潜りこみ、ポケットに手を突つ込む。

手紙は渡せない。早苗さんには、先輩が必要だ。先輩も早苗さんといるのが幸せだ。

二人を離ればなれにするわけにはいかない。

赤紙を枕の下に隠した。

隙間風の音を朝まで聞いていた。

凍りついた道を歩く。

静まり返つた冬の世界は、生き物の気配すらない。

吐息が冷気に包まれて消え去るのを見ながら、ただひたすら歩いた。後ろを振り返ると、小さな家はまだ眠つていた。太陽が顔を出す頃には、俺の不在に気づくだろうか。

屋根に積もつた雪は、昨日、眠たい目をこすりながら下ろした。しばらくは、重さに悲鳴を上げないですむだろう。

俺は、先輩になれなかつた。俺の心が作りあげたのは、誰にでも等しく優しさを分け与える存在だつた。そんな人間はどこにもいなかつた。

現実の先輩は、他の誰よりも早苗さんに優しかつた。

そんな先輩も、俺は好きになつた。

先輩のようになりたいと思つた。

本当の優しさは、誰かのためのものではないだらうか。

「大村先輩。戻つたら専属シェフにしてもらいますからね」

感謝はいらない。だけど、見返りくらいは求めていいはずだ。

俺は、木村冬弥と印字された赤紙を鞄にしました。

縦に棒を一本付け足したくらいじや、ばれないだらう。

寝起きの鳥が羽ばたき、細かな雪が空に舞つた。
頬に触れた雪が心地良かつた。

優しさとは（後書き）

好きな人に優しくする。
それだけで、幸せなんだと思つ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5638z/>

Tender Snow

2011年12月20日20時45分発行